

2026 年度前期小論文模範解答

タイトル：客観的視点が引き出す工学の美

課題文で筆者は、高浜虚子の「客観写生」という考え方に触れ、作り手の個人的な感情や自己主張という主観を消し、平坦な日常の情景を淡々と描くことでこそ人々の深い共感が生まれると述べている。そして、この姿勢はデザインや日常の製品作りにも通じると主張している。私はこの考え方に強く共感し、工学の分野においても自分のこだわりという主観にとらわれず、使う人の立場や日常の姿を客観的に見つめることが最も重要であると考えます。

工学や製品開発の現場では、技術者や制作者が自らの高度な技術力や斬新なアイデアといった主観的なこだわりを優先してしまうことがある。しかし、使う人にとって複雑すぎる機能や個性的すぎるデザインは、日常の中で使いづらさを感じさせたり、かえって満足度を下げたりすることにつながる。優れた製品とは、作り手の主張が前面に出たものではなく、誰もが直感的に使いこなすことができ、生活の中に自然と溶け込むような製品である。そのためには、人々が日常でどのような行動をとり、何を求めているのかを客観的な視点から観察し、製品設計に活かす姿勢が欠かせない。

過剰な主張や装飾を取り払い、使う人の視点に立って洗練された機能や形を追求することは、製品全体の美しさや使いやすさを生み出すことにつながる。自らの主観を一度抑え、客観的な事実や人々の共通の体験に向き合うことこそが、ものづくりにおいて人々に受け入れられ、長く愛される価値を創出する。

このように、工学における美しさや優れたデザインとは、作り手の主観を前面に出すのではなく、客観的な視点によって人々の生活や共感に寄り添うことで実現される。私は大学での工学の学びを通して、この客観的な視点を養い、使う人の心に寄り添うものづくりを目指していきたい。(767 字)